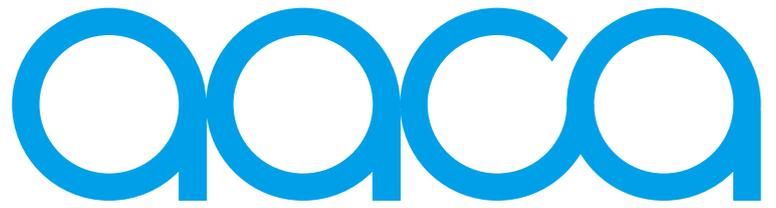


2021.10 no.91



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第二回日本建築美術工芸協会賞「東御市芸術むら公園 結いの高欄道」
(写真提供：保科豊巳)

第二回日本建築美術工芸協会賞受賞作品



(撮影：飯田郷介)

日本建築美術工芸協会賞は、日本建築美術工芸協会目的に合う建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携・協力によって優れた芸術的環境（建築・庭園・インテリアその他を含む）を創造した、あるいは優れた芸術的環境に関し多大な業績があった個人またはグループが選ばれます。

第二回日本建築美術工芸協会賞（1992年）

受賞作品 北御牧村（現・東御市）芸術むら公園

「結いの高欄道」（長野県東御市八重原1806）

受賞者 保科豊巳 + ベルグ環境設計

（この年は、「能登島カルチャーパーク」毛綱毅曠建築事務所と2点の受賞となりました。本号では、「結いの高欄道」をご紹介します。「能登島」は次の機会のご紹介いたします。）

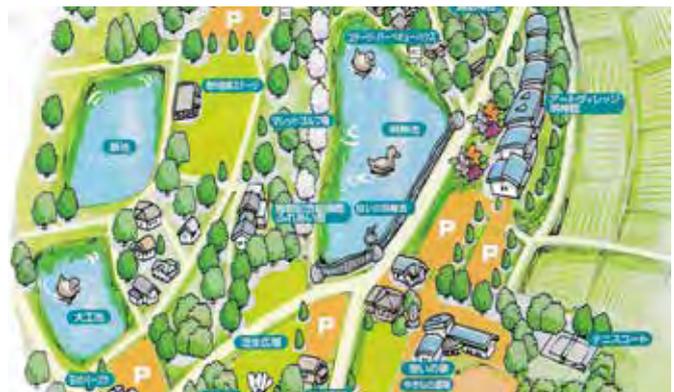
〈選考委員講評〉

委員長 嘉門安雄

委員 曾田雄亮 小林治人 栄久庵憲司 三輪正弘 宮本忠長(敬称略)

・“結いの高欄道”は非常に意欲的な作品である。最近、地方都市では橋の欄干は町の個性を出す一助として色々デザインされたものが多く作られているが、どの一つを取っても見せ物的性格を出るものではない、ところがこの保科さんの作品は欄干一つで自然空間に独自の美的環境を作り出している点、特筆すべき点だと思う。（曾田雄亮）

・文化への理解ということで最近日本の各地の道路・橋などで芸術的活動と試みが盛んになってきている。このような傾向自体は喜ばしい事と受けとめられるが習熟度、不釣り合い、わざとらしい目障りなど、むしろマイナスのイメージに連なるような事例も多い。そんな中で、本格的なデザインがなされている「結いの高欄道」浅間山を望む風景の中に良い意味で強力なインパクトを与えているといえる。このような作品例は、今後全国各地に類似の空間を有している。建設省道路局をはじめ多くの関係者への美しい風景づくりの広がりのある空間のドラマづくりのためのメッセージとして影響力が大きいと判断できる。（小林治人）



(東御市観光協会「芸術むら公園」案内パンフレットより)

CONTENTS

■時代の華一輪

雑感 — AACA会長職の8年間 岡本 賢 4

■第4回BOX展 —30cm × 30cm × 30cmの空間を遊ぶ—

開催総告 6

審査総評 8

受賞作品 9

出品作品 10

最優秀賞を受賞して 知多秀夫 13



▶▶ 4

■「AACA 賞の今」を訪ねて

東御市芸術むら公園「結いの高欄道」 広報委員会 14



▶▶ 6

■会員活動レポート

BOX展の作品について 「無限の融合と変異」 鈴木法明 16

新しいライフスタイルの中のアート 上村伴子 17

空間表現を探して 二井 進 18

今だから思うこと… 高須好子 19

「転生」受賞に際しまして 神まさこ 20

自粛・分岐点・成長 神 芳子 21



▶▶ 14

■連載 (4回連載)

藤井厚二と木造モダニズム建築「聴竹居」(4) 松隈 章 22

■法人会員の設計事務所を訪ねて

株式会社石本建築設計事務所part 1 三上紀子 24



▶▶ 24

■法人会員の企業活動を訪ねて

太陽工業株式会社 広報委員会 26

■会員増強委員会だより

第4回aacaサロンの開催報告 都築良典 28

第5回aacaサロンの開催報告 浜田 優 29



▶▶ 26

■情報文化研究委員会だより

「市中の山居」を探るキーが“池”に? 露口典子 30

■文化事業委員会だより

着任のご挨拶 木村慶太 31

■事務局だより

32

雑感－aaca 会長職の8年間

建築家
日本建築美術工芸協会会員
岡本 賢



2008年当時副会長だった私に aaca 創立 20 周年記念事業の実行委員長を任されました。様々な企画立案と協賛金の収集が大きな仕事でした。当時 aaca は、財政事情が極端に悪化していて、この機会に何とか収益を上げて財政基盤を回復させる事も大きな目的でもありました。最大のイベントは、後に世界遺産となった石見銀山をテーマにしたシンポジウムと大手組織設計事務所のトップによるビックプロジェクトについてのシンポジウムで、共に多くの聴衆を集めて高い収益を上げることができました。結果、会員の皆様の活発な活動のお蔭で 20 周年記念事業は成功の中に完了し、財政も改善状態に回復していきました。

そして、2018年の創立 30 周年を今度は会長として迎える事になるとは思いませんでした。2012年に中島会長が退任される事になり、後任の会長職をとの声を頂いて逡巡しました。芦原先生が創設された aaca が坂田誠造さん、中島昌信さんという錚々たる方々の後に私では荷が重いと悩みましたが巡り合わせかなと思いついて引き受ける事にしました。今や aaca は社会の中で、その存在が認められています。aaca の前身に建築美術工業協会があり、建築家と美術家が交流し、さらにそれを取り囲む多様な技術者やメーカーの方々が情報交換する場でした。そして芦原先生がその理念である「文化的で美しい都市環境の創造」を aaca の理念として掲げて新しく文化庁所管の文化団体として生まれ変わりました。他の様々な団体は業界団体であったり、資格者団体であったり、同業者団体や学会や同窓会等々全て同じ背景を持つ人々の集まりであるのに対して aaca は全く異なる

あらゆる種類の立場の人々が集まるという極めてユニークな団体でした。それはまた aaca としての寄るべき立場がない、やらなければならないミッションがないという事で、aaca としてまとまっていくための方策が一番の課題ではないかと思いました。それまでも様々な委員会活動が活発に行われていて、その原動力は会員の皆様の存在感の発露ではないかと思われます。また、発案した企画に対して多くの人々の協力が得られる環境です。様々な分野の方々が様々な情報を持ち、様々なアイデアを出し合って事業の内容を高めていく事が出来ます。aaca の最大の特徴は、広く開かれフラットな関係の中で自由に活動出来る事、aaca というグラウンドの上で様々な競技を自由に行う事が最大の魅力だと思いました。会員の皆様が自由に事業を立ち上げ自由に活動し、成果を挙げて達成感を味わう事が出来る、そんな aaca が望ましいと思いました。会長以下執行体制は会員に制約を与えず会員の提案を全て受け入れ、会員の活動に介入しない開かれたイメージが必要だと思っていました。ただ財政状態が脆弱なため事務局からのサポートが充分行えず、全て会員の皆様のボランティアで行う事、企画案が費用を伴う事が不可能である事だけが制約でした。それに応じて会員の方々は知恵を絞って収益に結びつく事業運営に努めて頂いた事は感謝に絶えません。

私の友人で不動産建設業のスタートの副会長をしている友とある会合で aaca への入会を勧めたところ、協会の設立記念会パーティーに参加してくれました。その時に開発計画の初期の段階からアーティストの参加が出来ないかとい



文化庁宮田亮平長官（当時）との鼎談



創立 30 周年記念会

う話が出ました。アイデアは良いが費用の問題がネックとなりそうな時に、当時展覧会委員会委員長をされていた安河内敦子理事からプロジェクトの中にアートの設置場所を提供していただけるなら、作家は無償で作品を設置させてもらう事が出来るという提案がなされ、街なかのオープンギャラリーで展覧会を行うというユニークな発想の企画が始まり、「街なかミュゼ」として本来 aaca が目指している建築家とアーティストの協働という具体的な展開が可能となりました。スターツ側はアートのある建築として付加価値をつける戦略にもなりました。プロジェクトの1%をアートのためのという目標を憲章にも盛り込みましたが別の形でこのように実現出来たのではないかと考えています。

30周年記念事業は、岩井光男副会長に実行委員長をお願いして、20件を超える記念事業を展開することになりました。記念誌の発刊に当たっては、巻頭鼎談を文化庁の宮田亮平長官と松本哲夫さんとで対談する事になり、久米設計が設計した文化庁に出かけました。長官のお話の中で「建築はアートそのもの」という言葉が心に残りました。そして aaca は活動の柱を建てて広く外部に向かって発信していくべきとの言葉を頂きました。記念シンポジウムは、銀座の3つのプロジェクトを取り上げて3回の連続講演会を開催し、最後に行われた、この3つのプロジェクトを含めた銀座の景観についてのシンポジウムは圧巻でした。この3回連続講演会+シンポジウムの方式は芝山哲也理事の提案で、今までにないユニークな手法で次のテーマへと続いています。また、地方創生を捉えた「ローカリティへ魅せ

るしつらえ」や宇都宮をテーマに行われた「地域の文化芸術活動」など、今話題の地域の活性化を早くから視点に捉えています。30周年でこそ可能になった企画が展開され、aaca の鋭い感性が発揮されています。協賛金も目標を達成し、20周年を大きく上回る成果を挙げることができました。

私自身の aaca での最大の楽しみは AACA 賞の審査で、全国各地を訪れて優れた作品を設計者の丁寧な説明で見学出来る事です。会長は審査員はダメだと中島会長に言われて一時中断しましたが、皆様に無理に復活をお願いして、12回参加しています。数多くの優れた作品群に出会い、その理念を聞かせてもらえるチャンスを aaca で頂いた事は感謝の念に絶えません。

aaca は、他の協会と異なり会員が主役の会なので執行部からテーマが出されて会員がそれを実行するという事はないので、会長職もあまり目立った事を行わない方が良いのでは思っていました。対外的にはもう少し積極的に活動した方が良かったかなと反省しております。いずれにしても多くの皆様と知己を得て、多くの方々と議論をさせて頂き、目を開く様にご意見を頂き大変感謝しております。大いに勉強になり、また大いに楽しませて頂きました8年間でした。

改めて心から感謝申し上げます。aaca の更なる発展をお祈り申し上げます。



街なかミュゼ表彰式



テレビコマーシャルにも取り上げられた街なかミュゼ作品



岡本氏がデザインしたポスター

第4回BOX展 - 30cm×30cm×30cmで遊ぶ -

開催報告

展覧会委員会

まずは、コロナ禍の緊急事態宣言の中、各方面の皆様のご協力の下、第4回BOX展が無事に開催できましたことを感謝申し上げますと共に、報告させていただきます。

1.事業企画名：第4回BOX展-30cm×30cm×30cmで遊ぶ

2.企画内容：30cm×30cm×30cmの立方空間を自由に使用した作品による展覧会（平面、立体は問わず）

3.目的・対象：国籍、年齢、プロ・アマ、aaca会員・一般参加を問わず募集し、建築・美術・工芸など様々なジャンルと自由な素材を使用した、多様な表現の場となり、交流の場となる新しい形の展覧会を目指し、優秀な作品と人気作品には賞状と協賛各社の副賞を授与。作品制作を応援しaacaの活動の一環として社会的な意義を広め高める事を目的としています。

4.期間：令和3（2021）年6月5日（土）～6月11日（金）
表彰式：搬出：6月11日（金）13時～

5.搬入：令和3（2021）年6月4日（金）10時～
搬出：令和3年6月11日（金）15時～

6.会場：建築会館1Fギャラリー

各賞と受賞者：aacaBOX展賞

◎最優秀賞1作品：No22知多 秀夫『愛の館』

◎優秀賞2作品：No8鈴木 法明『無限の融合と変異』／
No44神 まさこ『転生』

◎佳作4作品：No2横沢 和則『サステナブル・ブルー』／
No20（株）野口硝子『湘南ブルー』
No25上村 伴子『キュービック・ミラクル』／
No41中嶋 久美『アフター・ザ・レイン』

◎特別賞1作品：No17・18笹岡 かおり『ひつじの冒険-地図にない島-』『テレスポロス-行く手を照らすこびと-』

◎オーディエンス賞1作品：No3金原 京子『不思議の森』

7.選出方法：審査員の点数と来場者得票の合計得点・オーディエンス賞：来場者投票による集計の最高得票作品

8.審査員：審査委員長：aaca副会長 岩井光男

総務委員会委員長 二本柳 敏、景観シンポジウム委員会委員長 本 耕一、会員交流委員会委員長 青木 崇、文化事業委員会 木村 慶太、表彰委員会委員長 可児 才介、情報文化委員会委員長 坂上 直哉、フォーラム委員会委員長 立石 博巳、広報委員会委員長 飯田 郷介、会員増強委員会委員長 柴山 哲也、展覧会委員会 平山 健雄

9.協賛：株式会社クサカベ（12色絵具セット3点）

株式会社文房堂（スケッチブック3冊）

株式会社名村大成堂（絵筆3本セット3点）

株式会社アクエリアス（キャンパス3点）

光スタンド工房（仏製スタンドガラス見本1セット）

10.実行委員：第4回BOX展実行委員長 野口真理、展覧会委員

11.応募総数：44名（2名キャンセル） 会員25名 一般19名（学生1名含）

12.作品出展総数：41名、43点（内招待2点 東條隆郎 平山 健雄）

13.来場者数：会期7日中151名（1名ずつの来場者カードの集計より）

（敬称略）

■総括：新規の試みとして、広報委員会の皆様のご協力も得て、動画と作品毎のスチル撮影及びYouTubeアップと告知が実現いたしました。コロナ禍中の開催でもあり、無観客での開催を想定し事業のアーカイブ化と今後の広報活動と告知に繋がり、インターネット環境があれば地球上での観覧が可能となり、本展とaacaの国際的認知にも繋がるとの考えから画像のクオリティも重要と考え、美術展撮影のプロに依頼いたしました。他に新規取り組みとしても、展示作品のキャプションに各作家のステートメントを掲載して作品と共に掲示。会場ではYouTubeの告知チラシの他、展示配置図付の出品目録を作成して配布いたしました。出品者の年齢層は10代から80代で素材と表現の幅も広がり、作品のテーマと素材も現代を反映した「サステナブル」「エコロジー」などのテーマで制作されたものが各賞の上位を占めたことは、重要な意義があると感じております。ギャラリー受付の場所を変更したことにより、会場の利点も最大限に活かすことができ、出品者の方を含めた来場者の方々の感想とご意見もこれまで以上に大好評頂きました。

展覧会委員会委員長 平山健雄

副委員長 松田静心



東條隆郎 aaca 会長



佳作受賞 (株)野口硝子



佳作受賞 横沢和則氏



審査総評

審査委員長 岩井光男

6月5日から1週間、第4回BOX展は建築会館のパティオに面した1階ギャラリーで開催されました。

一辺30cmの立方体の限定された空間に表現された43点の出品作品は作家の個性的な創造力と表現力によって展示空間は自然光に輝く美しいアート空間となりました。作品の審査はaaca展覧会委員会委員の発案によるたいへんユニークな審査方法で、期間中BOX展に参加されたaaca各委員会委員長とギャラリーの投票によって各賞が決定されました。今回最多の投票数を獲得して最優秀賞に選出されたのは知多秀夫氏の作品「愛の館」でした。段ボールの持つ多孔質な断面を巧みに使って、一辺30cmの立方体を構築し、その内部空間の上面と下面を繋ぐ白濁した半透明の氷柱状の物質を林立させたシンプルな空間構成なのですが、パティオからの光の反射、屈折によって暖かい愛を感じる神秘的な世界を創り出している作品でした。私は「愛の館」を見て鍾乳洞の空間と共通するもの感じました。鍾乳洞は石灰石が地表水、地下水によって溶食され洞窟内に滲出して沈積した鍾乳石が天井から氷柱状に垂れるものと地上から積みあがる石筍とが繋がり、石柱に成長して行く自然が造り出す空間ですが、氷柱と石筍が結び合って石柱になるには人類の歴史を遥かに超えた異次元の時間を必要とします。この作品を拝見して鍾乳洞と共通する時を超越し、ゆったりとした時間の空間に漂う暖かさを感じました。また優秀賞に選ばれた鈴木法明氏の作品「無限の融合と変異」は30cmの立方体の空間が時空を超えてメービウスの帯と共に無限の融合と変異を繰り返す宇宙空間を鈴木氏のポキャラリーで表現した明解な作品でした。もう一つの優秀賞に選ばれた神まさこ氏の作品「転生」は洗練された俳句のような作品でした。俳句は五・七・五の十七音を定型とする短い詩です。この限られた文字数によって人間の持つ多様な心の世界を無駄なく表現する俳句と共通するものを感じました。今回、出品された作品全体を見て感じたことはアート作家の持つ個性が際立つ作品ほど見る人を楽しませてくれるということでした。そこには作品を通して作家との会話が生まれます。布、紙、木、ガラス、金属、プラスチック、皮革など様々な素材を巧みに使ってBOXと言う限られた空間で表現されるアートは人間の持つ多様な視覚的世界を創り出しているように感じました。日本建築美術工芸協会はその名の通り多種多様なアーティストが集まり交流することを目的にしている協会です。BOX展に出展された作家の作品を通して会員相互の交流が広がって行くことを願っています。折しも新型コロナ禍によって行動の自由を制限さ

れ、たいへん鬱屈な日常を送っている昨今、どんな外部的制約があろうとも人間の持つ創造力、表現力は自由であるということを今回のBOX展から感じました。参加して頂いた作家の方々、作品を見て、投票していただいたギャラリーの皆様ありがとうございました。次回も期待しています。



岩井光男審査委員長



オーディエンス賞受賞 金原京子氏

●最優秀賞



知多秀夫 愛の館
ダンボール、ボンド
愛は不安定であるが、愛の証で館を作り生活をしている建物は透明、不透明な空間で、時には、愛の相克に軋みながら構築して行く関係は愛の表現を芝居小屋の舞台上で情に変えて幻を感じる生活に浸かる場所になるのでしょうか？

●優秀賞



鈴木法明
無限の融合と変異
チタンとステンレス
温暖化で凍土から眠っていた未知のウィルスが地上に現れて来るようです。コロナウィルスもその類かも知れません。この作品は全ての概念及び物質等の融合と変異を、無限を意味するメビウスの輪で表現したものです。

神 まさこ 転生
炭、金属
生命ある物は、あらゆる物体に変化をし、それはまた生命ある物として存在していくのではないかと？松の丸太が炭と変化した様に魅せられ制作しました。



●オーディエンス賞

金原京子 不思議の森
ペットボトル
日常生活の中で今や欠かせないペットボトル 使用後はゴミになります。もったいない。透明な容器も見方を変えれば個々な物に変化 その可能性を身の周りや自然から感じとって創作して行きたいと思っています。



●特別賞

笹岡かおり
ひつじの冒険—地図にない島—
羊毛、毛糸、ワイヤー
私のウールワークのマスコットキャラクター「上を向いて一步踏み出す羊」が世の中を旅して廻るシーンのひとコマ。こんな街が世界にはわりとフツーに存在するとか。



笹岡かおり テレスポロス—行く手を照らすこびと—
羊毛、ガラスケース
心理学者ユングが晩年自ら彫ったという石碑の中の童神、テレスポロス。ギリシャの医神アスクレピオスの補佐役だったという。頭巾を被ってカンテラを下げたその姿に親しみを覚え、再現してみた。

●佳作



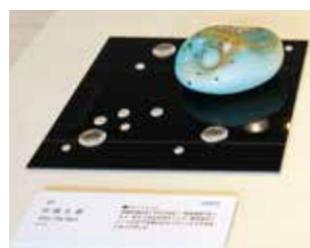
横沢和則
SUSTAINABLE BLUE
硬質発泡アクリル材
ゴミ処理が世界的に深刻な環境破壊問題となっている現代。自陣の創作活動で輩出してしまった廃棄材料に、もう一度“生命”を与えられたら・・・持続可能な創造社会を願う気持ちを、強いブルーで表現してみました。



(株)野口硝子
湘南ブルー
ガラス
物を作っているとどうしても端材がでてしまいます。硝子端材はまるで海のようにとても美しく、なんとか再利用ができないかと工房では日々奮闘しています。端材から新しいガラスになるまでの過程をオブジェにしました。



上村伴子
Cubic Miracle
シナベニア、アルミ板、ステンレス板、アクリル絵具
30センチの立方体がそれ以上の空間的大きさを感じるように、そして6面すべての方向から鑑賞できる(置き方を変える)空間表現を目指して、私のデザインパターンの一つである「ミラクル」の材料、色調で表現した。



中嶋久美
After the Rain
ガラス
空間を埋め尽くすのではなく、無色透明であったり、あえて余白を残すことで、鑑賞者のイメージの中で空間が広がっていくような作品に仕上げました。

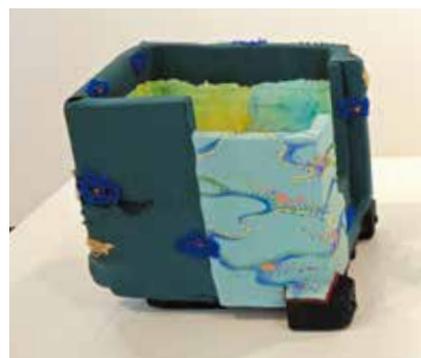
出品作品



吉野ヨシ子 豊かな地球へ！
ブロンズ



中野敦子 アンバランス
絹の布と色



品川未知子 花の小道の小物入れ
絹地、絹糸、絹糸臈、和紙、発泡スチロール、他



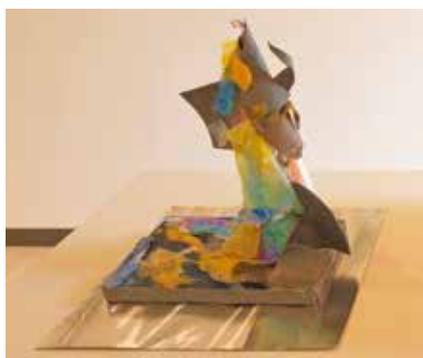
松本治子 Organic playset—有機的遊具—
木の枝、大理石、タイル、セメント、砂



鈴木千賀子 花水木
クスノキ、彩色、箔、レンガ



沼田直英 射影空間—無限遠
木材、P,P



渡辺雅子 時の残滓 2021-4
ミクストメディア



山崎和子 Urban Cube
紙布 (フェルト)



若月弓枝 Unison
石、ガラス



李染はむ 富士山
木材、アクリル、粘土



久野博美 おもいは出る
古布、廃材、絹糸



SAYO NEON Garden Box
写真、アクリル、ライト



高須好子 ヒカリ
布地・糸・絹、ラメ、本金糸



深尾雅子 増殖“J”
真鍮ワイヤー、コム、他



澤田石貴子 とりのめ (The bird's eye view)
アクリルガッシュ、墨



太田紀里 空想
紙ストロー、紙バンド



野口真理 つちのたね
陶土、粉漆、金属箔



若松美佐子 波
絹布、麻糸



佐藤静子 !? (So what! Now What?)
ケミカルレース、エンプロイダリーレース



まつい由美子 枇杷の葉一枚
石塑粘土、アルミ



平山健雄 持続不可能な空間
ガラス、マグネット



五十嵐通代 包む
絹、黄銅線、綿、アクリル、ガラス



山崎輝子 転生の貌
皮革、鉛板、ワイヤー、マグネット



松田静心 PePPerMint, bLue
アクリル板、水、紙、火山灰、他



出居麻美 群がる
食品パッケージ、レーヨン糸



山崎哲夫 立体造形用ブロックのみを使用した「八坂神社西楼門モデル」
細長形白木材ブロック (使用ピース 344 個)



舎 真治 Tree - Cristal
木



上江洲牧子 あなたのハートはどれですか 私は…
ガラス、木、箔、鏡



島崎英子 My dog cushion (想像力は無限大模様)
クッションカバー (綿 100%) シルクコットン、バンヤ (羽毛)



神 芳子 Dragon 2021
藤、ワイヤー



吉田 実 庭の石
磁器



舎 真治 Flap ! Flap ! Your Wing-tree mouvement
series-
木 (柳 & 桂)



東條隆郎 「OXALIS」冬至の頃
写真

第 4 回 BOX 展の展示風景はこちらでご覧いただけます

http://art-museum.main.jp/jam_live2021/aaca01/panorama/

1. 展示会総合画面 (ジャパンアートミュージアムの HP)

http://art-museum.main.jp/jam_live2021/aaca01

2. パノラマ画像 (ジャパンアートミュージアムの HP)

http://art-museum.main.jp/jam_live2021/aaca01/panorama/

3. YouTube

<https://youtu.be/uNtbsrgz4L0> どうぞよろしくお願ひします。



最優秀賞を受賞して

現代アーティスト 知多 秀夫

愛の館、私の目指した立体空間は、私が絵の具を買う画材店の2階にある、ハニカムボードで立体の骨格になると私は確信した。AACA.BOX展、30cmキュービック規格のコンクールでした。私は昔、約6坪の丸太小屋を1年掛けて自力で建てた。この小屋は直径10cmの不揃いで、4mの皮付きのカラマツでした。100本購入して皮削ぎ、深さ1mの穴を柄杓で土をすくって丸太を立てる。その私の姿を見て友達に笑われた。その穴に丸太を半分に割り全体に張るには大変なので、道路側だけに丸太を張ったが、裏や屋根はトタンを張った。それでも張り残しの場所をお歳暮用の塩サケの箱の板を利用した。それは私の家が魚店だったので、毎朝、父を車に乗せて魚市場に買い出しに行っていた。その頃世間は故郷の父母や親戚に塩サケを贈る慣習があった。

塩サケは北海道から木箱入りで送って来る。その木箱は横に漁場の問屋の名前入りで寸法が揃っていて、加工しなくても使用出来る。私は揃った板だけ集めて、後の不払い

の板はドラム缶で焚火をして、父の仕入れを待ち、集まった魚と板を乗せて、店に戻り魚を下ろし、板は小屋の現場に持ち帰り、張り残しの場所に張った。私がこの小屋を創るきっかけは、父が戦争中に住んでいた家が、道路の向かいにあった東京都の木材置き場が米軍の焼夷弾で火事になり、それを父が消火をしていたら父の自宅が燃えてしまった。しかし東京都の木材は無事だったので、父は木材を貰い家を建てた。その事を知ったのは、道路の拡張のため父の建てた家を壊す事になった為だ。壊す事を手伝って塩サケの板を使っている事も知った。その事が支えでもあって無事に完成した。出来上がった小屋を山小屋と名前付けてスナック開いた。小屋は欠陥だらけ、風とうしが良い、雨漏りはなかったけれど、俄かの私がマスター、スナックの事も良く知らず始めて3年間続けた。大変だったが山小屋は男と女の交差点の館になったが、残念な事に文化が生まれなかったのが愛される。(2021.7.15)



最優秀賞受賞 知多秀夫氏



「2022年度 第5回BOX展」(予定)

2022年6月4日(土)～10日(金) 11:00～18:00

会場 建築会館1Fギャラリー

搬入6月3日(金)、搬出6月10日(金)

募集内容 30cm×30cm×30cmの空間に入る作品による
展示(立体・平面・表現方法は不問)

東御市芸術むら公園「結いの高欄道」

東京藝術大学名誉教授 保科豊巳

広報委員会

「隙間の思考」

昭和63年(1988)奈良時代須恵器文化ゆかりの地でもある北御牧村(現・東御市)明神池周辺の優れた自然環境を守り後世に継承していきたいという住民の熱い意向を受け、住民と行政が一体となって「ふるさと創造の森構想」が策定され、平成元年(1989)6月、「芸術むら公園」の整備が自治省(当時)のふるさとづくり特別対策事業に指定され、芸術家が工房を作ったり生活できたりするような環境を芸術家たちに開放できるような公園にしようという、約18ヘクタールの公園整備計画がスタートしました。そして、まず明神池の回りに造形物をつくるために地元出身の保科豊巳氏に声がかかりました。現地を訪れてみると、池だけしかない、何もないところで、自然環境が良い場所であったが行ってみて一つだけ環境を壊すものがあったそうです。それは池の回りに張り巡らせてあった長さ300メートルほどの白いガードレールでした。その前の年に開催されたオランダ(アイントフォーヘン)での展覧会のため1年ほどオランダで過ごされたそうですが、オランダの公園の池の回りにはガードレールなどなく、自然のままに子供が遊んでいたことを思い出され、明神池を囲むガードレールを違うものに代えたいと思われたそうです。そのころ保科氏は、環境芸術に取り組む中で、「隙間の思考」を考え始めていたそうです。それは目的があるものの中に作品を滑り込ませるといった考えで、池という遊ぶ空間と人を守るというガードレールの間に作品をつくり、ガードレールの役目を持ちながら、しかも造形的な美しさ、芸術的なものを設置するという考えでした。全国には白いガードレールがありますが、それは美しくなく、また環境を阻害していますが、そこに彫刻をつくるという考えではなく、目的を持って使用されているものを芸術として変えることで隙間に芸術が入っていきます。芸術の役割というのは単に芸術作品を独立してつくるのではなく、今使われているものの隙間をさがして変換させて、用途をもちながらも芸術作品にしていく、それが環境をよくしていくことになるのです。

「結いの高欄道」は、360本の鑄造作品を連続させた彫刻的な作品です。現地は360度全部山々を見渡せるころなので、欄干のデザインはその稜線を組み合わせようと、山並みをスケッチして稜線のイメージにつなげ、風景の山並みに触れるような、身体感覚を環境の中に持ち込みたかったそうです。そのため欄干は上下、水平方向に曲がりうねっているのです。15センチメートルごとの受け(手摺子)を角

度に合わせて一本一本つくり、360本すべて現場溶接を行い、寒い季節の中、組み立てに三か月かかったそうです。間に配置された石は地元の鉄平石を蓼科山から選んで運んできて、8個、石と組み合わせて山並みをつくっています。また、中央部の立ち上げるラインにも苦勞されたそうで、まずは木でモデルをつくってから鑄造されました。中央部で、山並みが盛り上がり天に向かっていくような形に、欄干でありながら彫刻作品にしたいと、雲の中に盛り上がっていくようなイメージで、この線の先は浅間山を差しているそうです。今までにガードレールを作品にしてしまう、公共的な要素を持ちながら芸術作品としてしまうという前例がなかったためか、アメリカのメディアに取り上げられたそうです。その後「芸術むら公園」には、青木繁や埋没画家などの作品を展示する「梅野記念絵画館」、温泉宿「アートヴィレッジ明神館」や竹紙工房、やきもの工房、登り窯などがオープンしています。

ここはそこ、そこはここ

保科豊巳氏は、「わたしは、日本の山間部の谷間の川岸にある家で生まれた。川の水の流れる音は、生まれながらにして耳の中に染みついている。左右に押し迫る山と山によって、朝日はいつも9時頃にならないと昇らない。青く晴れた空は私の家から見える穹窿のほんのわずかしら覗けない。まるで大地の割れ目から見える向こうの世界のようで、その向こう側の世界は私にとってあこがれであった。夜になると風景は一変し、暗闇の中に消え去り、ただ目に刺すような星の輝きだけが私に世界を開放してくれた。川はいつも人間のどろどろした関係を忘れさせてくれた。私はいつもこのような自然と一体化したかった」(保科豊巳展2012年図録より)と北御牧村の大自然の中で生まれ育ち、東京藝術大学美術学部絵画学科に入学されます。学園紛争が終った1970年代、西洋的な油絵を学ぼうと入った油絵科では、ヌード・デッサンやヌードの油絵をやられ、それが非常に儀式めいて思い、そこで何のために芸術をやるのかという根本的な問題を探るため、しばらく制作を中断し表現の出発点に立とうと考えられました。「頼りになるのは自分のボディーしかなく、いちばん単純なところで表現活動ができないか」と考え、自分の記憶の原点である田舎へ帰りました。そこで子供のころから遊んでいた明神池との衝撃的な再会がありました。北御牧村は、蓼科の川から水を引いて水田開拓をしていたころなので、灌漑用ため池が多く、

明神池もそのため池の一つでしたが、どうしてもその場所が気になり1979年の冬出かけていきました。氷が張っている上に雪が積もりスノー・フィールドとなった明神池の湖面と陸地との境界、つまり安全地帯と死に至る危険地帯との間を歩き、それを記録し写真として銀座で展示したところ、ポンピドー美術館の学芸員の目にとまり、初めての作品展となり、インスタレーションでのデビュー作ともなりました。次の第1回浜松野外展(1982)《海と陸の間》では砂丘の上に木でつくられた橋が潮の干満にさらされる「境界に漂う流動性、あるいはプロセス『間』の世界」を表現されました。

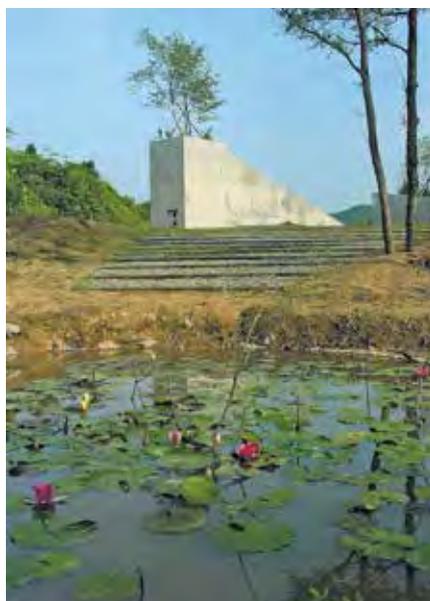
「私の作品は、私の身体を通して(媒体として)私の生活している日常から発生し、実在する物質と空間に身体を介在させて場に形に与え、見る者にそれらと素材との交換を提供する。それぞれの記号性を極度に抑えることによって、見る者が繋ぎ止めようとする視線や身体性を宙返りにしてしまう。そこに内容を示す基準は何もなく、作品は装置でありそこに『答え』はない。むしろ『答え』は見る者の内部に送り返してゆく。そして、その場の意識を『ここにいる』という実感と『あそこにいる』という実感を共存させて、中世的な場を発生させることにある。それは世界の結界を生きる感触である。私の主体はPrivateとPublicの間にあり、私の使用する素材は私の精神を暗示し、肉体は物質としてではなく生きることにプロセスとして存在する」(以下写真共、保科豊

巳展2012年図録より)と語られていますが以後、国内外で次々と作品を発表されています。第12回パリ・ビエンナーレ展(1982)では、「木、紙、墨」で作品を構成され、さらに「木、紙、墨」に鉄が加わり、またある時は映像を駆使され、《天空に昇る滝を見るための階段》(2005)では煉瓦を使い、「御八代大橋」の高欄では、石、ステンレスに陶板が使われなど多彩な材料が使われていますが、その場所、環境に合わせて素材は選ばれるそうです。妻有トリエンナーレプロジェクトぶなが池植物公園での《天に降りたmother's treeの庭園》ではコンクリートで造られた階段を上り切った先には1本のブナの木が植えられている作品ですが、保科氏は、「自分は仕掛け人で、仕掛けられるのは皆さん」と語るように、階段を上らせるように仕掛け、欄干を触るように仕掛け、また家の形をしたインスタレーションでは、部屋に入らせるよう仕掛けられています。また、「作品には必ず物語がある。インスタレーションにも物語が存在している」と言われる保科氏の作品の物語を読み解きながらじっくりと作品鑑賞していただきたいと思います。

芸術むら公園「梅野記念絵画館」で11月3日より12月12日まで「保科豊巳展」が開催されます。展示は、「黒い雨」シリーズだそうです。それは東日本大震災の二日後に雨が降り、松戸のご自宅の庭に置いておいたスライスした花崗岩に黒いしみがついたことに触発されたことにより制作されたそうです。(飯田郷介)



海と陸の間(静岡)第1回浜松野外展



ぶなが池植物公園 天に降りたmother's treeの庭園



御八代大橋(東御市)1998年 陶、ステンレス、伊達冠石

会員活動レポート

BOX 展の作品について 「無限の融合と変異」

グローバリゼーションの発展により、地球温暖化が進み、アラスカやシベリアの永久凍土も融けて眠っていた未知のウイルスなどが地上に現れてくる可能性が有るようです。現在世界中を脅かしているコロナウイルスもその一種かも知れません。

この作品は、変異を意味する鏡面仕上げをしたステンレス球の周囲を、ステンレス線材によりぐるぐる巻きにして、線材の中央部にステンレス球が浮いた状態に位置させ、その外面にはチタン材により○+△□◎等の異なった形状の融合体により球状に形成するとともに、さらにその外面には無限を意味したメビウスの輪を2組交差した状態に構成したものです。

第6回街に飛び出す作品展に出品した作品は、私が長い間シリーズで発表している「出会い」をモチーフにした作品で、この度はネコとウサギが窓を境に、ガラス越しに掌と掌を合わせている情景をもとに材質はチタンで構成した作品でしたが、レセプションのときに、ご来場くださった狛江市のマンションオーナー様より、ネコではなくオーナー様の愛犬に変えることは可能ですかと質問されましたので、ハイ問題ありませんと答えると、その場で制作を依頼されました。後日愛犬の写真を送って頂き制作に取り組みましたが一寸心配でした。仮組の状態一度ご高覧頂き、それから細部を仕上げ現場設置をしたら、オーナー様もお嬢様方も、大変喜んでくださったので本当に嬉しく思いました。

今までは、自分が創作したいものだけを自分なりに制作発表して来ましたが、このように皆様に喜んで頂ければ、これからはご希望に添った作品制作も出来るのではないかと思います。



第4回 BOX 展優秀賞
「無限の融合と変異」



彫刻家
日本建築美術工芸協会会員
鈴木法明

2019年1月に、つくばエクスプレスの流山おおたかの森駅の駅舎から、スタートおおたかの森ホールとルミエールホールに接続されたペデストリアンデッキの目前下に設置した作品は、題名「出会い」材質はチタンとステンレス(304)によるもので、雨上がりに少年と愛犬が散歩の途中で切り株の上にいた蛙と出会い、その隣には高さ7、2mのステンレス製の大樹を錆び付けし、上部の枝にはペデストリアンデッキを通行する歩行者の目線に合うように、チタンを素材としたつがいのオオタカが寄り添っている情景を表現した作品です。

設置してから半年程過ぎて現場へ行き、スタートおおたかの森ホールの筒井館長にお会いしましたら、彫刻の周囲の芝生が枯れ、土が凹んでるのは、作品が子供達に親しまれ彫刻と遊んでいるからですよとお聞きし、自分が制作した彫刻が子供達の仲間として好感を持たれることを知り、この場所に設置させて頂き本当に心より感謝申し上げます。

これからも観る人触る人に一寸でも興味を持たれる作品づくりに精進したいと思っております。



「出会い」



「出会い」

新しいライフスタイルの中のアート

Atelier Team MB 主宰
造形作家
日本建築美術工芸協会会員
上村伴子



この度は、2020年BOX展において入賞をいただきありがとうございます。この作品は実験的な作品でしたので、とりあえず実験成功と受け止めても喜んでいきます。この作品は、私の作品シリーズ「ミラクル」のデザインを使用しました。「ミラクル」は平面絵画からスタートし大型立体作品へと発展しました。BOX展の30センチ立方体の中に取り入れるという制作制限に新鮮な創作的魅力を感じ挑戦してみたいと思いました。

大型作品では考えられないことですが、サイコロのように6面どの面でも自立し、かつデザインとしても成立するものを制作しようと目標を立てました。重さのバランスを取ることと色面の配置に気を配りました。

時々、どのように制作するのか聞かれることがありますので、ここで簡単にご紹介いたします。まず、立体の模型を作ります。大型の場合は十分の一の大きさで作りますが、今回は実寸での大きさでしたから実感が掴みやすかったです。実物はシナベニヤ板での制作ですが、模型は発泡スチロールのような発泡系の素材を使い、カッターで直方体を切ったりつなげたりしながら造形します。次に、使う色の色紙を作り、色面と金属のアルミ板とステンレスミラー板の位置と形状をデザインします。ミラー板の写し込みも計算に入れながらトリッキーなデザインを考えるのが楽しいです。デザインが決まったらアクリル絵具で着色し、鍍金屋さんでカットしてもらった金属板を接着して完成します。

私の作品は「ミラクル」のようなカラフルなもの他に、漆喰と岩絵具を使ったものがあります。岩絵具の美しさに見せられて美大では日本画を専攻しましたが、その時、金属板と岩絵具の組み合わせの美しさに出会いました。天然素材同士、相性が良かったのでしょうか。漆喰も然りです。漆喰は凹凸がつけられるので独特の味が出せるため好んで

使っています。

話題は変わりますが、最近、新たに感じるがあります。それは、長引くコロナ禍で人々のライフスタイルが少しずつ変わってきていることです。その一つにテレワークとワーケーションの導入があります。今までは、通勤一仕事一通りの単調な毎日でしたが、自然豊かな地方での仕事が可能になりました。1日の中で、仕事だけではなく、その田舎にあるもの、たとえば、海、山、川、温泉等の自然の恵みを楽しむ時間を取るという仕事の仕方が生まれました。あるIT企業の社員に田舎でのワーケーションを体験してもらった結果、仕事内容は同じであっても、また、仕事時間数が田舎生活を楽しむ時間（温泉、散策、海で泳ぐ、郷土食を作ってゆっくり食べる等）によって減っても仕事効率は落ちるどころか大幅にアップし、新しい発想が生まれやすくなったというのです。しかもストレスが軽減し、ほぼなくなったという人もいました。この結果を見ると、仕事に振り回されないより人間的な生活が生まれたことがわかります。もちろん、全ての職種で可能なことではありませんが、このような新しいライフスタイルの人々が増えてくることによって、人々の生活意識が変わって行くだろうと思います。人間らしい感性の回復が期待できます。私たちアートに携わる者にとっても、この方向は人々との心の接点が広がり、ともに分かち合える機会が増えていくような気がします。コロナ禍で負の作用ばかり頭がいっぱいになりますが、思っても見ないプラスの作用も提供してくれるのではないかと考えたいです。

ちょうどこの号が出されるころには、私も八ヶ岳の麓の新しいアトリエで創作活動を始めます。今後、豊かな自然の中で私の感性がどのように変化していくか楽しみです。



第4回BOX展入賞作品

空間表現を探して

造形作家
新制作協会会員
日本建築美術工芸協会会員
二井 進



空間造形を創めて40年を過ぎます。

平面表現から空間表現へと表現形態を変えていく段階でシルクスクリーン印刷を立体の中に取り入れて表現の一部とならないかと試行錯誤しながら制作していきました。作品の一部として表面に色を用いたり糊の厚みを利用して凹凸のあるテクスチャー表現を試みたり、場（台）の空間性を表現するために金属板に印刷したりと様々な試みをしてきました。

色彩を取り入れることで周囲との同化を試みてきました。

今、作品表現（平面・立体）はモノトーンによる表現を試みています。

自ら色を発信するか、モノトーンによって色を取り込むかということになるのではないかと考えています。

モノトーンの表現によって墨絵のような淡い墨から濃い墨の重なり合い、変化していく姿を見るように、白い作品の中の面の動きによって、緩やかに変化していく面と、面と面が切替わる場面でのエッジが運動性を表したり、光と影による濃淡の動きに空間の面白さを感じています。

作品自体の形態の在り方ということもありますが、形態が作り出す陰影の動きによって浮かび上がってくる面の動きはどうか、また周囲の環境とどのように相まって来るのかを感じて、どのような場を生み出すのか面白さはあります。

何気ない逆光からのシルエットによって生み出されてくる光と影のストーリーも非常に面白く感じています。

この空間、環境ということに興味を持って活動しています。

自然、人工のものがどのように存在しているのか、どういう関係性を持っているのか、どのような場づくりをしているのかを見ていくと色々感じ取ることができます。

遠近感、バランス、コントラスト、ハーモニー、運動（空気の流れ）など自然の岩、木、水の動き、構造的性、空間性を探ってみると作品制作のヒントになることが多く感じ取ることができます。また、面白さも感じ取ることもできます。

近年は、作品を見せるのではなく、空間を見せるというこ

とを意識して制作しています。目に見える自然物のねじれ、木のもつ運動、造形の面白さは興味を引く。上に動き、下に動き、右に左に、周囲の環境（土、雨、風、太陽の動き）に応じて形を作っている。またそういう自然物の中を通り抜ける水や空気もうねり、渦巻き、ゆらぎ、形を作っています。

そのような動きの中（見える形、見えない形）に造形の要素は隠れていて、その要素を基に見える形へと提案できればと思っています。また、制作していく中で「間」を大事にしています。何もない空間（余白）が大事であり、ないからこそ何かを感じ取ることができると思っています。

「間」を作る。

「間」から生まれる。

「間-余韻」ある動作状態が継続している状態。

「間-空間」その場に在るものの関係性。

作品を制作し、位置づけることによる「間」の取り方、方向性によっていろいろなストーリーとなるものが想起することが出来ます。このストーリー性の面白さは制作者、鑑賞者それぞれの五感を通しての経験の違いによりさまざまに感じ取ることができ多様なイメージの変化を知ることができ対話の面白さを感じています。

移動する視線でもって形を見て行くことができる。このような視線の移動と視界を拡大させる眼の動きは空間をとらえイメージを生み出していくことができると思っています。



帰 2015



守り人 2012



混沌 2018

今だから思うこと…

刺繍作家
若草会会員
日本建築美術工芸協会会員
高須好子



2020年、そして2021年。テレビではオリンピック。コロナを少し忘れられる。選手たちはどれほどの葛藤をして、どれほどの不安と努力をして、どれほどの助けをもらって、この舞台に立っているのだろうか。そのパフォーマンスに感動して涙が出る。彼らに舞台は必要なのだ。

今年7月、女子美高の同級生の油を観に久しぶりに都美術館を訪れた。あんなにしょっちゅう来ていたのに涙がこみ上げてくる。作家にも舞台は必要なのだ。

いよいよ解釈すれば締め切りのない時間を与えられた。刺繍をするわたしは、ひと針ひと針を楽しみながら、じっくりと作品づくりに取り組もうと思った。

コロナ禍の中、迷いつつも昨年11月と今年の5月に銀座ギャラリーのばなの企画展に出品した。会場に足を運んでくださる方は少なかったありがたい。作品の感想をもらったり、もっと他の作品を見たいとの声もあった。励みになる。

職人でもあるわたしにしか出来ない作品があると思う。

今回のボックス展に出品した作品は幾何学模様を絹糸の美しい光と本金の神々しい光を意識して、縫い方はシンプルであるが、職人としてのきちんとした作品になったと思う。

糸のより方を変えると糸の表情も変わる。違う色の糸を混ぜてよると、絵の具を混ぜた感覚と同じだ。違う色を重ねて縫うと深みが出たり、透明感も出る。今度は何でトライしようかと考えている。キャンパスになる布を染めよう。糸も染めよう。

いくつもの発表の場を失われた作家だけでなく、その舞台を用意してくださるギャラリーの方、スタッフの方の苦労も計り知れない。

作家として、刺繍をもっと発信していかなければと、このコロナ禍で思っている。



ヒカリ (300 × 300)



ひかり (1040 × 1040)



海宙 (250 × 280)



晴 (1300 × 1000)



ひかり (1040 × 1040)



2020 銀座ギャラリーのばな

「転生」受賞に際しまして

「ボックス展」30センチ立法の空間内に納まる作品制作は、沢山の課題を秘め、奥深いものと毎回感じております。私個人の考えに依るものですが、思いを表現したい事に、一つの素材に拘らなくても良いのではないかと考え、異素材の材料を複合し制作する事も心がけています。ここ暫くは、木を焼き上げ炭を創ることから始める事になっています。陶芸用窯に丸太を入れて、幾時間も火加減をし続ける持続した緊張感はなかなか慣れないものです。それは火の力を借りながら、窯の中で燃え尽きるかもしれないという怖さや不安感からかもしれません。

では、何故炭に拘るのかと申しますと、年輪をくっきり残し黒光りした、原形を留めながらも異素材と化した炭の美しさに魅せられた事。「輪廻転生」を常にコンセプトとして制作している中で、制作過程も含めて、作品に思いを込めたいからです。平面作品の場合は同じく板を墨色になる

造形作家
日本建築美術工芸協会会員

神まさこ



まで焼き、その板と金属を融合させ一つの作品に仕上げる事もしています。こちらは直接バーナーで焼き上げるので、暑い最中に熱い作業は、緊張感とともに命がけといっても過言ではない制作作業となります。しかしながら、その焼き上がった木目やマット調の墨色は、人工的ではない美しさを感じ、作品に思いが滲み込む気がいたします。

さて、ここからが本番です。この炭や墨色の木を使って、その思いをどの形で、どのように表現できるかとなると、まだまだ試行錯誤の連続で道のりが長いのが現状です。この様な中、皆々様、沢山の方々に、ご高覧、ご講評頂け、今回このように受賞できましたことは、大変光栄であり、大きく勇気を頂きました。心より感謝しております。これを機に更に次への段階へと進みたいと考えております。どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。



自粛・分岐点・成長

昨年2020年前半はコロナ感染の対応策が見いだせずただただ振り回されるばかりでした。教室中止、企画展、協会の展示会の延期と先行きが見えぬまま時間が過ぎました。後半は教室を通信講座とし、個展は新たに広い会場に変え、先延ばしにすることとしました。今まで40年近く教室指導と作家活動と忙しく進めて参りましたが、分岐点と捉えています。コロナ禍の中、時間が取れることができました。私はこのような感染状況下の中でこそ文化活動は必要不可欠であると思っています。

○今後の活動内容

<新制作協会京都巡回展>京都市京セラ美術館

2021年10月26日(火)~10月31日(日)

<バスケットリージャパン2022年展>東京芸術劇場

2022年1月26(水)~1月30日(日)

<バスケットリー神芳子展>京王プラザホテルTOKYO

2023年

バスケットリー作家
新制作協会会員
日本建築美術工芸協会会員
神 芳子



BOX 展 Dragon
H25cm W 40cm



旋回 H250cm W160cm D50cm



Fennec H250cm W140cm D50cm



Dragon2021
H210cm W95cm D20cm

連載（4回連載）

重要文化財「聴竹居」を次代に引き継いで行くために



竹中工務店設計本部
聴竹居倶楽部代表理事
日本建築美術工芸協会法人会員
松隈 章

■建築家が建てた昭和の住宅として初の重要文化財

2017年7月31日付官報で「指定名;重要文化財 聴竹居(藤井厚二自邸)」文部科学省告示第102号)が通知され、「京都帝国大学教授であった藤井厚二が、日本の気候風土や起居様式に適合した理想的な住宅を追求して完成させた自邸である。機能主義の理念と数寄屋技法の融合、室内環境改善のための設備整備などの創意が実践されている。工学的理念に基づいたモダニズム住宅の先駆的存在として住宅史上、建築学上重要である」と記載された。指定の名称も、建築家が自ら名付けた名称であるとの判断から、従来の「〇〇家住宅」を改め、初のネーミングとして「聴竹居(藤井厚二自邸)」なり、建築家が建てた昭和の住宅として初めて国の重要文化財となった。

「聴竹居」が国の重要文化財に指定された意義は、今私たちが暮らしている日本人のための住まいの原型・原点を見直すきっかけをもたらしたことで、建築家が自らの住まい(自邸)で挑戦した新しい住まい方を“実物で知る”機会を将来にわたってもたらしてくれたことにある。

■竣工後最大の被害を受け災害復旧工事に着手

2018年6月18日に重文指定から一年足らずで発生した大阪北部地震、さらに同年9月4日には台風21号の直撃を受けて、本屋と閑室は1928年の竣工以来最大の被害に見舞われた。すぐさま京都府文化財保護課と文化庁から調査官が被災状況調査に来られ、同年11月には国庫補助金を得て災害復旧工事に着手することになった。具体的内容としては、崩れ落ちた本屋の屋根瓦の葺き替え、崩れた本屋と閑室の外壁の土壁の下地からの補修と外壁全周の仕上げの塗り替え(本屋は黄大津、閑室は聚楽)、台風による強風でめくれ上がった閑室西側の軒庇木部の補修などを2019年春までに行った。また、大阪北部地震で前庭の地面に大きな亀裂が生じたことを受けて竹中工務店が独自に地盤調査を行った

結果、将来的に大地震等で前庭の南斜面が崩落する危険性が高いことが判明。2019年5月から10月にかけてノンフレーム工法による地滑り対策工事を単費(所有者だけの費用)で実施した。

■茶室の全解体修理と本屋・閑室の内装保存修理

2019年秋には、傷みが酷かった茶室(下閑室)を京都府文化財保護課の技師が現場に常駐する国庫補助事業としての本格修理工事実施が決定し、年末から素屋根の架構が行われ全解体修理が始まる。同時に災害復旧工事では未実施だった本屋と閑室の耐震診断・耐震補強、部分修理(内装)にも着手することとなった。

◆保存修理工事事業：2019年11月～2022年6月(予定)

- *閑室は2020年5月末に、本屋は2020年12月末に部分修理(内装)完了
- ・設計・監理(国庫補助事業)：京都府教育庁指導部文化財保護課建造物担当
- ・本屋：建築面積173.20㎡、鉄板葺一部棧瓦葺、導気口付附・家具4点 *1928年建築
- <国庫補助事業> 部分修理(屋内貼付壁・漆喰壁・建具、畳、床のたわみ、照明具・障子和紙貼替、玄関外灯木部の補修、耐震補強)
- <所有者負担事業> 自動火災報知設備設置、漏電対策、屋根鉄板葺き部分の防錆塗装・閑室; 建築面積45.90㎡、銅板葺一部棧瓦葺附・家具6点 *1928年建築
- <国庫補助事業> 部分修理(屋内貼付壁・漆喰壁・建具・畳・照明具和紙張替、耐震補強)
- <所有者負担事業> 自動火災報知設備設置、漏電対策、下段の間・天井照明具の復元
- ・茶室(下閑室)：*修理中* 建築面積32.68㎡、銅板葺



2020年1月 茶室(下閑室)の解体前の全景



2020年4月 茶室(下閑室)解体用の素屋根



2020年7月 茶室(下閑室)の全解体作業

一部棧瓦葺、導気口付*1931年建築
 <国庫補助事業> 全解体修理（建築一式・左官・表具・屋根・基礎、耐震診断・耐震補強）

<所有者負担事業>電気・水道等インフラ整備、活用整備（便所設備）

・庭園整備・雨水排水整備についても基本方針策定及び設計について文化庁・京都府等と協議中

◆防災施設整備事業：2020年10月～2022年3月（予定）

2019年には4月のパリの「ノートルダム大聖堂」や10月の沖縄の「首里城正殿を含む建物8棟」と言った世界的に著名な木造建造物の焼損が続き、マスコミでも大きく報道され、社会的にも危機意識が高まった。そうした状況下、木造建築である重要文化財「聴竹居」全体を火災から守るため、防災施設整備事業として国庫補助金を得て、放水銃（自動散水消火）とそのための地下貯留水槽及びポンプ室（景観を考慮し全て地中埋設）を備える工事に2020年10月に着手、現在施工中で2022年春に完了予定。

■『聴竹居保存活用計画』の作成と文化庁による認定

ハード面としての保存修理と同時に、建物の維持管理に関する対応や今後の保存活用方針と言ったソフト面を記載した『聴竹居保存活用計画』を作成した。それは、国の宝として未来永劫遺さなければならない重要文化財建造物を次代に引き継いでいくために必要な建物の取扱説明書と言える。編集・執筆は、文化財関係者の指導を受けながら建物所有者である竹中工務店の大阪本店設計部が中心となり、重文指定後直ぐの2017年7月に着手し2019年春に完成した。内容的には、1.計画の概要、2.保存管理計画、3.環境保全計画、4.防災計画、5.活用計画、6.保護に係る諸手続の全6章と、外構を含む建物の内外部から家具、照明、衛

生設備、建具金物に至るまで詳細にわたる部位の設定と保護の方針を定めた保存管理計画の別表により構成された120ページの冊子になっている。2019年11月には文化庁の認定を受け、建物所有者と文化財関係者の想いを共有したものになった。今後はこの計画書に基づいて維持管理や保存修理を行っていくと共に5年を区切りとして記載内容の見直しと更新をしていくことになる。

■次代に引き継いで行くために、今、私たちにできること

2016年12月に土地・建物を藤井家から譲り受けて5年。竹中工務店は、「聴竹居」を次代に引き継いで行くために、今、私たちにできることとして、社内外の多くの方々の知恵と技を結集して、重要文化財指定、災害復旧、保存修理、防災施設整備、さらに保存活用計画策定等を重点的に実施してきた。この1年半ほどは新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延により一般見学者への公開を中断することも多かったが、一方でハード面の施設整備と奇跡的に聴竹居内に遺されていた手書き原稿、欧米視察日記、スケッチブック、などの藤井厚二アーカイブスの整理・リスト化などを含め、ソフト面での整備にも時間を割くことが出来た。

これからも建物所有者である竹中工務店と建物の日常維持管理運営を担当する聴竹居倶楽部を中心に、文化財関係者、保存修理を担う職人、シビックプライドを持つ地域住民、藤井厚二研究会と言った“TEAM 聴竹居”で重要文化財「聴竹居」を地域に根差した日本の宝として遺していかなければならない。全体の整備が完了する来年夏以降、再び多くの方が藤井厚二の「日本の住宅」の思想を「聴竹居」という実物や藤井厚二アーカイブスを通して学ぶ姿が見られることを楽しみにしたい。

4回の連載をご愛読ありがとうございました。ぜひ、聴竹居へお越し下さい。



2021年5月 地下貯留槽の山留工事完了時の集合写真



2021年8月 茶室（下閑室）の組立て令和3年と刻印された新設柱



2019年11月 『聴竹居 保存活用計画』の表紙

株式会社 石本建築事務所 Part I

広報委員会

■はじめに

本シリーズの第3回目は、株式会社 石本建築事務所を Part I～IIIの3回にわけてご紹介します。

昭和2年（1927）建築家石本喜久治によって設立された石本建築事務所は、今年で創立94周年を迎えます。

石本建築事務所の創始者である石本喜久治は、大正～昭和の激動の時代に＜先見性＞と＜独立不羈＞の精神をもって当時の建築界を先導した建築家です。昭和38年（1963）に69歳で没するまで、生涯設計者として日本の近現代建築史に残る多くの建築を手掛けました。一方、経営者としての手腕も併せ持ち、石本建築事務所をいち早く組織事務所へと導きました。



石本喜久治氏

本号のPart Iでは、石本建築事務所の創始者である石本喜久治の建築への情熱と、石本建築事務所の萌芽的發展について見ていきます。

■創始者／石本喜久治と「分離派建築会」の活動

石本喜久治は明治27年（1894）神戸に生まれました。幼少・青年期を京都・大阪で過ごし、東京帝国大学工学部に入学、建築学科に進みます。

石本の建築家としての出発は、「分離派建築会」の活動において語られます。大正9年（1920）東京帝国大学工学部建築学科卒業に際し、堀口捨巳・山田守・瀧澤真弓・森田慶一・矢田茂と共に「分離派建築会」を名乗り、日本で最初となる卒業設計の自主展示を企画、「分離派建築会宣言」を発表します。

「分離派建築会」が分離を宣言したのは“過去建築圏”すなわち西洋の様式建築からの分離でした。「分離派建築会」のメンバーは、建築様式に縛られない“自由な創造意思”による造形を「創作」＝「個人の「芸術意欲」に基づく制作」という言葉に込めました。当時、日本ではアールヌーボーやゼセッションなどの新しい潮流が西欧から伝えられ、構造材料として鉄骨構造や鉄筋コンクリート構造の導入が推進され始めていた頃でした。様々な折衷様式が生み出され、新しい構造技術とともに新しい様式の模索を行っていた時代背景があります。「分離派建築会」は、“建築は芸術である”と訴え、展示会の開催や作品集の出版を通じて8年間に渡り彼らの主張を発信しました。

「分離派建築会」の活動は新しい建築をめざす者たちに多大なる影響を与え、日本の近代建築史に現れた最初の建築運動とし

て位置づけられています。

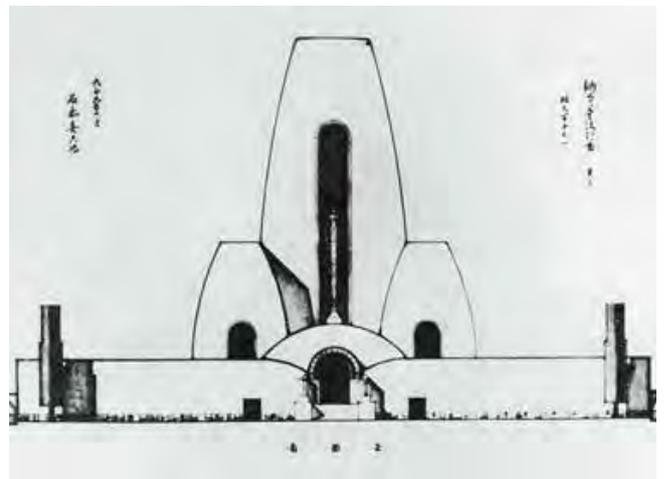
かつて石本喜久治は帝国大学工学部建築学科在学中の論考の中で、「建築は立派な芸術であり、詩であるから、自分の感情、信仰が建築のリズムに現れる。」と書いています。東京帝国大学工学部建築学科卒業設計の「納骨堂（涙凝れりーある一族の納骨堂）」にはそれが穏やかに込められています。

■渡欧～建築家へ萌芽する

「分離派建築会」のメンバーのなかでも石本喜久治はいち早く海外に旅立っています。帝国大学卒業後、竹中工務店設計部に入り、その2年後に渡欧、大正11年（1922）～大正12年（1923）にかけてドイツ・オーストリアを巡り、ブルーノ・タウトが手がけたマグデブルクの都市などを訪れています。パウハウスではウルター・グロピウスと会い、建築から家具その他の幅広い分野の芸術的な活動に感銘し、欧州ゼセッション運動の本場ウィーンで薫陶を受けます。また、カンディンスキー、アルキベンコ、ザッキンら新進画家や近代彫刻家に触れ、ヨーロッパの最新の造形美術運動を吸収し、沢山の文献と美術工芸品を日本へ持ち帰ります。その経験は『建築譜』としてまとめられ、当時の若い建築家・デザイナーを刺激し啓蒙しました。

帰国後、石本は竹中工務店設計部において山口銀行東京支店（1923）や東京朝日新聞社社屋（1927）の設計を手掛け、そこに渡欧の成果を込めます。中でも東京朝日新聞社社屋は、過去の一切の様式にとらわれない自由で大胆な表現主義的設計で、これまでの建築への理念を存分に発揮する作品となりました。

東京朝日新聞社社屋では、外壁の曲線に加えて窓の形状を巧みに使い分けるとともに、曲線と機能を結び付けて内部の機能



東京帝国大学工学部建築学科卒業設計
納骨堂（涙凝れりーある一族の納骨堂）（1920）



『建築譜』1924(大正13年 芸苑社刊)

の違いを表現しました。またディテールにはウイナー・ゼセッションの本場で習得した分離派模様といわれる幾何学模様を用いています。『東京朝日新聞小観』に記された石本による設計主旨によれば、「全然新しい時代精神—生活意識を根底とし反映しつつ建築自身にキャラクターシックな機能と、新しい構造材料とから来るラジカルな而してラショナルな新しい形式そのもの」*と、建築家としての合理主義的な視点が明確に打ち出されています。

また石本は大正15年(1926)の論考「建築美に就いて」において、「建築が資本主義社会における「商品」として存在し、公共建築の発生などとともに人間の生活上必要なもの」としての唯物論的な価値観に立つ建築美について語っています。“機能性”を美として捉える視点や“プランニング”をその対象とした点に、その時代をつくらんとする建築家ならではの視点と先見性を感じざるを得ません。

■独立：片岡石本建築事務所を設立

東京朝日新聞社社屋の設計により、建築家・石本喜久治は、一躍日本の前衛建築をリードする存在となりました。東京朝日新聞社社屋に惚れ込んだ白木屋百貨店の西野社長は、石本に白木屋百貨店日本橋本店の設計を委嘱し、これを機に石本は竹中工務店を退職し独立します。

昭和2年(1927)片岡石本建築事務所を設立、これが現在



白木屋百貨店(1931)

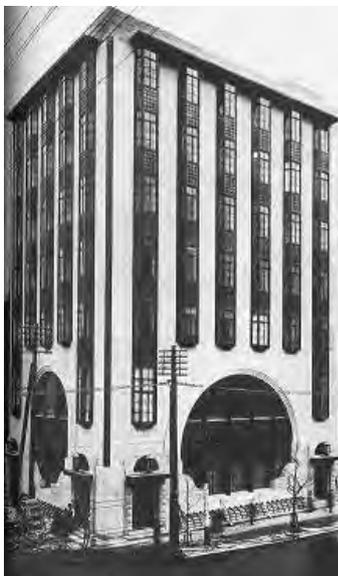
に至る石本建築事務所の始まりとなりました。

白木屋百貨店日本橋本店の設計ではそれまでの歴史的な様式から脱し、構成主義のデザインを基調に水平線と格子状を強調したファザードや、濃密な構成主義風の細部デザインをふんだんに用いました。一方、プランニングにおいては、食堂・健康相談所・美容室・写真室・子供の国など都市生活に供する多様な機能を組み込むなど、百貨店建築の新たなあり方を提案し、都市から生活のスケールに至るまで、「生活に必須な諸機能」すなわち機能的な造形としてオーガニックに統合された「総合体」として、人々の生活を彩る建築へと昇華しました。

白木屋百貨店全館が竣工した昭和6年(1931)、片岡安の引退を機に、「石本建築事務所」と改組し、新たな建築事務所の出発となります。当初は銀座の片隅で、海老原一郎と二人での船出でしたが、竹中工務店で仕事を手伝っていた山口文象が石本建築事務所へと移り、白木屋のプロジェクトリーダーとして活躍します。建築設計界でリーダーシップを発揮する石本建築事務所には多くの若き建築家達が集い、武雄、立原道造、西山卯三など後の日本建築界を支える多くのメンバーが所員として入所し、博多株式取引所(1934)や日本タイプライター社屋(1936)など、石本建築事務所はさまざまな規模の建築作品を創造し、着実に発展していきます。

(写真提供：石本建築事務所)

(文責：三上紀子)



山口銀行東京支店(1923)



東京朝日新聞社社屋(1927)



東京朝日新聞社(1927)内観

太陽工業株式会社

広報委員会

日本建築美術工芸協会に2008年4月に入会された太陽工業株式会社は、世界で初めて膜によるアリーナをつくり、世界で初めて海中膜を開発するなど、膜構造のパイオニアで、世界で最も多くの実績、世界のトップシェアの実績を持つ膜構造のリーディングカンパニーです。

太陽工業株式会社の歴史は、1922（大正11）年、能村金茂が大阪市大正区に「能村テント商会」を創業したことに始まります。創業者金茂は、「進取の気性に富む、アイデア豊かな経営者であった」と伝えられ、1929（昭和4）年には、「モダン・テント」とネーミングされたキャンプ用テントを製造・販売しています。このテントは、空気で膨らませた自転車のチューブを支柱とし、それを綿布で覆う構造で、その原理は現在の空気膜構造のエア・ビーム方式に通じるアイデアで当時としては画期的な技術でした。さらに陸軍の要請で開発した航空機格納庫用天幕が「能村式航空機格納庫」として指定を受けるなど、新技術・新製品を生んでいきましたが、第二次世界大戦の激化にともなって、1943（昭和18）年に公布された企業整備令により廃業を余儀なくされました。

終戦から一年後の1946（昭和21）年8月1日、能村金茂の長男龍太郎と次男博正により「能村縫工所」が設立されましたが、それは、足踏みの縫製ミシン一台と裁断用のハサミー丁によるリュックサックづくりからのスタートでした。そして、船舶のハッチカバーづくりで創立期の基礎を固め、1947（昭和22）年10月、株式会社組織に変更を行い、能村龍太郎が、「太陽こそ、万物すべての、エネルギーの源泉である」と、太陽工業株式会社に社名を変更しました。そして、アメリカ軍からの軍用テントの修理へと仕事を拡大させ、ハッチカバーからスタートした船舶用シートは、船舶業界の隆盛に合わせて商品のアイテムを増やし、それに関連して陸運、倉庫の運輸関係にもシートの注文が増えていきました。そして、アメリカ軍から払い下げられた軍

用テントは、タイミングよく発注された電源開発ダム工事の現場宿舎として活用され、これが建築工事用シート（養生シート）などで建築業界への開拓につながっていきました。

太陽工業株式会社は、60才、70才代の方々には懐かしい「ダイハツミゼット」、「木下サーカス」も手掛けられました。1955（昭和30）年、テント補修で信用を得ていたアメリカ軍からトラックのシートを受注しますが、その実績でダイハツ工業から、オート三輪「ミゼット」の運転台を覆う幌を受注します。この受注が、長年にわたり太陽工業株式会社の主力部門となる自動車資材部門の発端となり、自動車の内装部品も手掛け、1995（平成7）年6月まで続きました。そして、最初に取り組んだ大型テントが1956（昭和31）年に設計、製造を行った木下サーカスの大テントです。この大テントにより空中ブランコなどのダイナミックな演技を屋内で楽しむことができるようになりました。1963（昭和38）年には、年商10億円の大台に乗せて日本一のテント会社となり、そして大きな飛躍の機会となる日本万国博覧会が大阪で開催されるのです。

膜面構造が花開いた日本万国博覧会

1970（昭和45）年に開催された日本万国博覧会は、日本の経済成長の象徴としての大イベントであり、また大空間構造としての膜構造建築物が花開き、一気に開花した一大国家プロジェクトでもありました。この博覧会で太陽工業株式会社は、膜面構造による仮設建築物の90%以上を施工しました。中でも巨大な空気膜構造建築を世界で初めて実現したエア・ドーム方式のアメリカ館は、その後のアメリカでの巨大ドーム球場の一大建築ブームを生む先駆けとなり、直径4メートル、長さ60メートルのチューブ16本を繋ぎ合わせて作ったユニークな鞍型形状ドーム（エア・ビーム方式）の富士グループパビリオンは、その規模、耐久性、



モダンテント



木下サーカステント



日本万国博覧会アメリカ館

用途の多様性などから、画期的な構造物として世界から注目され、またサスペンション方式の「自動車工業会館」や「電気通信館」などのパビリオン群など、従来のテントの概念を一変させる様々なテント建築が正に花と咲き誇り、膜面構造は、その後の博覧会、茨城・つくばでの科学技術万国博、大阪・鶴見での国際花と緑の博覧会や神戸ポートピア博覧会などの地方博覧会の主役となっていきました。

この日本万国博覧会を契機にテント建築物の呼称は、「テント」から「膜構造物」へと表現を変えることになりましたが、まだ「仮設建築物」としての大きな壁がありました。日本万国博覧会でのアメリカ館は、博覧会終了後1ドルで払い下げるというアメリカ政府の申し入れがありましたが、当時の建築基準法では、膜構造物は仮設建築物であり恒久建築物として認められず再利用はなりませんでした。そして、「従来、テント建築に基準がなかったことが、業界にとっての最大の規制であった。技術的に安全が実証されながら、法的基準がないばかりに建築が認められなかったからだ」との強い思いを胸に龍太郎たち太陽工業マンの奔走、努力が実り、1987（昭和62）年、建築基準法が改正され、膜構造建築物が一般認定され、恒久的な建築物としての利用がスタートし、1988（昭和63）年に東京ドームが完成すると、国内各地に続々と膜構造建築物が誕生していくことになります。

世界のリーディングカンパニーへ

1967（昭和42）年、ニューヨーク事務所開設が世界市場への第一歩となり、1973（昭和48）年には、サンフランシスコにヘリオス社を設立すると共に、アメリカのエア・テントを始めとする膜面構造物を建造する大手テント会社のひとつであったホルコム社の株式を51%取得し、「世界一のテント会社」に向けて始動しました。さらに1992（平成4）年、アメリカの最大手のテント会社バードエア社を100%子会社

化すると、これを機にアメリカ国内での大型工事に積極的に参画し、アトランタオリンピックの会場「ジョージアドーム」やデンバー新国際空港の全長300メートルのターミナルビルを覆うテントなどを手掛け、アメリカでの業績を順調に伸ばしていきました。そして、アメリカでの市場を固めると、1933（平成5）年、シンガポール事務所を設立して、アジアに、そして世界へ市場を広げ、1976（昭和51）年には、売上高114億円38百万円と、売上高で「世界一のテント会社」としての地位を確立していきました。

建築から土木、物流、環境分野まで

太陽工業株式会社では、軽くて丈夫な「膜」の特性を活かし、建築の分野はもとより土木や物流分野、さらには、環境分野など幅広く事業を展開されています。

建築の分野では、ドーム球場、屋内競技場やサッカー場、屋外競技場などの観客席を覆う屋根などのスポーツ施設、空港や鉄道駅などの交通施設、教育・文化施設では、学校の体育館や屋内プールを覆う屋根や医療・福祉施設での通路や大きな庇、公園施設では、天候に左右されない半屋外空間を創り出し、また、商業・レジャー施設には今や膜構造はなくてはならない存在となり、大空間やイベントスペース創り出しています。

土木エンジニアリングは、一般にはあまり知られていませんが主力部門の一つで「港湾・海洋関連資材」、「治水・利水関連資材」、「治山・地盤改良資材」、「一般土木資材」での特殊なシート、特殊な工法が土木工事や災害復旧工事で活躍しています。また物流では、コンテナバックや保冷資材など物流を総合的にサポートしています。このように膜構造物が、博覧会やイベントなどでの利用に留まらず恒久建築物として、世界のいたるところで、花の如く白く優雅なフォルムの心地よい空間を創り出しています。



東京ドーム



東京駅八重洲口グランルーフ



聖地メディナの大型アンブレラ

会員増強委員会だより

第4回 aaca サロンの開催報告 『現代のライフスタイルと伝統工芸の ブランディングプロジェクト』

那須恵子（型屋 2110 伊勢型紙彫師）
江上浩生（有限会社N工房）
堺 若菜（リリカラ株式会社）

株式会社大林組設計本部長室
日本建築美術工芸協会法人会員
会員増強委員会委員
都築良典



aaca サロン第4回は、リリカラ株式会社より、「現代のライフスタイルと伝統工芸のブランディングプロジェクト」と題して、リリカラのデザイナー・堺若菜さん、伊勢型紙彫師-型屋 2110 の那須恵子さん、金銀砂子細工師-N 工房の江上浩生さんが登壇、インテリアにおける伝統工芸の新たな役割とそのブランディングの在り方について語っていただきました。

初めに那須さんと江上さんにより、伊勢型紙と金銀砂子細工の工芸として発展した経緯と、現代の生活に適應するモノとしての展開が語られ、その後堺さんから、伝統工芸を現代のブランドとして確立を目指す自社の試みについて、伊勢型紙のインテリアへの展開を例に、3人の鼎談を交えつつ紹介がありました。

那須さんが彫る伊勢型紙は、切り絵のように模様を彫刻した和紙で、着物などを染める型（道具）として現代まで受け継がれてきました。三重県鈴鹿市で15世紀に始まり、1985年に伝統的工芸品に指定、現在国指定重要無形文化財であります。手すき和紙と接着剤（防水・防虫剤）である柿渋で作る道具として、彫刻技法を駆使して独特の紋様の図柄を彫り作られます。暖簾、浴衣、江戸小紋の図柄として発展、その高度な技術は今後様々な素材への展開が見込めます。事例としてジュエリーなどのプロダクト、商業施設のインテリアへの応用などが紹介されました。

伊勢型紙の価値は、その「デザイン」だけでなく「彫刻技術」「機能」により、日本人の美意識、習慣、文化を表すことであると那須さんは語っています。良質の和紙、刃物の製造技術等に支えられてできる型紙自体が、幅広く協働できる技術（機能を持つ道具）であること、故に型紙の制作バックストーリーを伝えることの大切さ、ものづくりの深い理解を得ることの大切さを説かれました。

江上さんは、伝統工芸の箔、砂子細工、和紙染色を主に、現代の住空間、商業空間に合う、新しいものづくりに挑戦しています。

砂子細工の技法に加え、染色、揉み紙、櫛引、削ぎ落とし等、多様な「からかみ技法」を紹介し、制作に使用する実物の道具を示しながら、手作りの細工が唯一無二のものづくりに繋がることを説かれました。

紹介された和紙壁紙は、空間の意図に合わせた個性的な表情を作り出していました。襖紙から始まりアートパネルやカウンターバック等、現代のインテリア素材として発展、空間のアクセントとしても主張できる作品でした。

リリカラの堺さんからは、「kioi—伊勢型紙を現代のインテリアに—」と題して、江戸時代に伊勢型紙の保護をした紀州藩ゆかりの紀尾井町にある、紀尾井アートギャラリー「江戸の伊勢型紙美術館」との共同企画から生まれた壁紙について紹介がありました。壁紙ブランド「kioi」は、手仕事の良さを工業製品に生かす取り組みとして、伝統工芸としての伊勢型紙の図柄を現代のインテリアに生かすプロジェクトです。

リリカラでは、各地にある江戸時代から続く伝統工芸の作品

を、インテリアとして一つの空間に組み込む試み、その発信を行っています。

伝統工芸のブランディングには、それが現代の人々に共感をもって受け入れられ、信頼のおけるモノとして末永く使い続けていただく、より積極的な働きかけが求められていることが鼎談で語られました。

図柄などの意匠性と共にその素材そのものが持つ機能、美しさと手仕事の技術の持つ共感性が重要であると…。

コロナ禍において、仕事を含めた生活様式の変革が起きています。また、世界中で環境負荷低減への取り組みが求められています。伝統工芸においては、これらに適合、変革に適應した生産力になるものとして期待したいところです。

第4回 aaca サロンは、新規会員のリリカラ様より、プロダクトを通じてお付き合いのある二人の伝統工芸師をお招きしての会となりました。この機会を通じてお二人に aaca の活動をご理解いただくと共に、さらに交流の輪が広がることを期待しています。



伊勢型紙 むじなハート 那須恵子



からかみの技法 江上浩生



壁紙ブランド「kioi」
リリカラ株式会社
堺若菜

第4回 aaca サロン撮影風景

第5回 aaca サロンの開催報告 『光と共によみがえる再生硝子のアート』

板橋一広（アート作家）、
齋藤誠・黒田科子（遠藤照明）

鹿島建設株式会社建築設計本部
会員増強委員会委員
日本建築美術工芸協会法人会員
浜田 優



第5回 aaca サロンは、新規法人会員株式会社遠藤照明の企画で、アート作家の板橋一広氏をお招きし、遠藤照明のシニアディレクター齋藤誠氏、モデレーターに同じく遠藤照明黒田科子氏と共に、「光と共によみがえる再生硝子のアート」素材が物語る・時間・空間・光の効果とは？ というテーマで行われました。

趣味は「硝子と音楽」という板橋一広氏は、20世紀末頃から「ガラス作家」と呼ばれるようになるまでは環境デザイン・プランニングの仕事に従事。当時、コンペで当選した東京メトロ新御茶ノ水駅の壁面約250mのアートウォールを計画、色彩のデザインを志向し「暦の駅」と名付けた巨大壁画36枚は、地下鉄駅構内の大変過酷な環境を考慮し、ガラスモザイクを使った作品として制作。

そんな最中、メキシコにあるナイカ鉱山の発見を知り、その後の転機となる。2000年に地下300mから発見されたナイカ鉱山の洞内は、透明石膏（セレナイト）の巨大結晶で埋め尽くされている（fig1）。板橋氏は、この鉱山に大変興味を惹かれ、ナイカ鉱山の「ごっこ遊び」的に、立体・石英の様なボリュームのある素材の制作を始める。

「ガラスを溶かしてみたい」と思い始め、遊び心でガラスにアイロンをかけたり、七輪で焼いてみたりを始めたのが現在のきっかけ。割ったガラスの破片が、その痕跡を残すように様々な模様が出来ようになり、結晶の成長を温度帯の調整等で操作が出来ようになった。2009年には、イタリアミラノサローネに作品を出品。

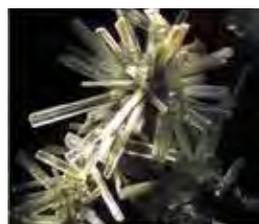


fig1 ナイカ鉱山

さらに、大判の板硝子（4×8サイズ）が作りたいと思い、自分の窯を持ちリサイクル硝子で作品を作り



fig 2 りんね・雪花硝子



fig 3 雪花硝子のカーテンウォール



fig 4 光学ガラスのカウンター



fig 5 雪花硝子の茶室



fig 6 宮益坂ビルディング



会場風景

始める。2006年、リサイクルガラスで作成された作品、りんね・雪花硝子がコンペでグランプリを獲得（fig2）、仕事の依頼が来るようになり硝子を作っていこうと決意されたとのこと。

その後、板橋氏と建築との関わりについて紹介頂きました。

明治神宮外苑アイススケートリンク増改築では、雪花硝子で外装カーテンウォールに挑戦（fig3）。恵比寿ヒルサイドガーデンでは、「クリスタライジング」というテーマで棒硝子を並べた壁面や、光学ガラスを積層した受付カウンターを制作（fig4）。スパイラルホールでは、建築家浦一也氏とのコラボレーションで「お茶室」を作成、雪花硝子で初めて空間を作る（fig5）。京都の二条城で開催されたアート京都という国際的イベントでは、「雪花庵」という茶室を展示。

宮益坂ビルディングは、68年前に日本で初めての分譲マンションを解体再生するというプロジェクトで、齋藤誠氏とコラボレーション（fig6）。

齋藤誠氏は、「ザ・ウィンザーホテル洞爺」を始め数多くの建築施設の照明計画・各種照明器具を開発、今回の雪花硝子のシャンデリアが設置されたエントランスホールの照明を計画するにあたってのお話を伺いました。光の当て方の検証から始まり、色温度の違う2つの光源2700Kと6500Kの選択、自然光の入る吹抜空間で、時間による表情の変化と調光調色により、朝から夜まで4つの顔を表現したとのこと。設置にあたっては、モックアップによる強度試験での安全性検証やシミュレーションによる光の効果の確認を行い、最終的には設置後の無線調光で、関係者全員が確認するという作業を行ったことを紹介。

最後に、遠藤照明の次世代調光調色シリーズ「Synca」により、雪花硝子を使った演出検証を行い、一つの照明器具で色温度だけではなく、カラー演出が可能になった今後の照明計画の可能性について語って頂きました。

第3回以降、covid19対策としてweb開催とさせて頂いています。今回は、遠藤照明の会議室をお借りし、遠藤照明スタッフの皆様のご協力のもと大変興味深いサロンが開催できましたことに感謝致します。

「市中の山居」を探るキーが“池”に？

情報文化研究委員会委員長 露口典子

『池の水ぜんぶ抜く大作戦』というTV番組が人気だ。いつも風景として見ている池の中には何があるのだろうか？池は私たちの想像をかき立てる何かがあるに違いない。

当委員会主催で開いた鼎談『市中の山居』* (2018.11)に端を発し、「池」に現代の「市中の山居」を探るカギを求めようと、東京の池巡りを2回実施(2019.10&12)したところでコロナ禍に突入してしまった。(2020.4 会報誌 No.87)

<オンライン会議の始まり始まり>

再開したのは昨年(2020)11月。オンライン会議(Zoom)がスタートした。集まったの池巡りも会議も不可。取材も不可…途方に暮れたが、まずは各人が関心をもった池を取り上げて、話題を広げていこうということになった。3週間ごとの水の日、水曜に「ワイガヤ会議」と称して約1時間半、文字通りワイワイガヤガヤが始まった。

<Zoomワイガヤ会議は面白い>

やってみるとZoom会議もなかなかのもの。日頃の委員会では会えなかった関東圏以外の委員の参加が得られる。そうすると、これまで東京周辺に限っていた話題が、奈良や京都、富山、鳥根と広がって、各地の池事情が見えてくる。

淡路島に行った三瓶委員から、日本一「ため池」が多い(約23,000)と報告があると、鳥根の中村委員から「しまねため池保全管理サポートセンター開設」の新聞記事が送られてくる。関西の大田委員からは奈良のため池は「四角い皿池」との発言を得る。兩山委員によると、世田谷区碑文谷公園弁天池は昔ため池として使われていたそうだ。そうか、東京にもため池はあったのだ。でも、関西に多いのはどうしてだろう？それはですね〜と、また話が弾む。

Zoomでは資料の同時共有が可能だ。立松委員が動画で紹介してくれた京都の代表的な池は、東京の大名屋敷池とは明らかに佇まいが違うことが参加者に瞬時に伝わる。栗田委員が大宮氷川神社を取り上げて「神域の池」を考えさせてくれたかと思えば、同じ神社仏閣でも、奈良の寺院池の風情は全く異なっている。大田区の池を調べた置鮎委員か

らは、国分寺崖線を中心とした高低差図が提示される。東京の地形が一目瞭然で、「湧水」について一同合点がいく。

さらに、ワイガヤ会議の面白さは、他の人の発表に触発されて、新たなダイナミックな展開があることだ。

坂上委員の撮った美しい写真は、交通量の多い都心にありながら、新宿御苑や目黒自然園の池にはカワウやアオサギ、カセワセミなどがイキイキと生を営んでいることに気づかせてくれた。そして、露口がカルガモ親子のお引越し報道につられて知ったのは、鶴見川流域に約4,900もある「調整池」の存在だった。すると、今度は高橋委員が四ツ谷南元町公園の地下に雨水調整池があると教えてくれた。

<60ヶ所の池が意味するものは？>

本年(2021)8月までに14回のzoomを重ねた結果、最初は中川委員が心安らぐ風景としてあげてくれた「市ヶ谷の釣り堀」から始まって、60ヶ所近くの池があがっていた。

一度それらがどのような池なのか見直してみようと、大田委員と置鮎委員がつくってくれた下記の分類項目に従って、各自が自分であげた池を独断と偏見で分けてみた。

源流の池、灌漑の池、棚田池、防御の池、防災の池、近代インフラの池、文化の池、都市遊水の池など紙面の都合上、まとめたリストは掲載できないが、今後この中から何が見えてくるのか楽しみだ。

<まだまだ続く池の旅>

地球は70%が水から成っている「水の惑星」だ。人間の体も60%が水。だから私たちは「溜まった水」に惹かれるのか。それにしては近代化、都市開発の名の下に、都市文化と自然の結節点だった多くの池が埋め立てられてきた。

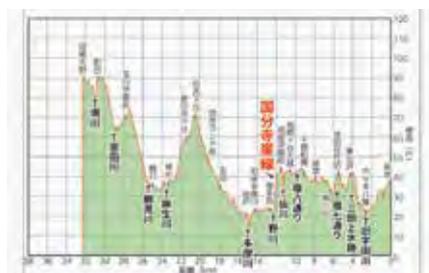
「地図の共有は文化の共有に、文化の共有は志の共鳴にいたる」。鶴見川流域ネットワークキングが掲げている言葉だ。

近頃、情文委員はどこに行っても池が気になる。坂上前委員長から引き継いで、高橋副委員長とともに「現代の市中の山居」を探るワクワクドキドキの旅を続けていきたい。

*鼎談『市中の山居』(2018.11)
<https://www.youtube.com/watch?v=MiSOHYSM4is>



目黒自然園にて(坂上委員)



国分寺崖線を中心とした高低差図(置鮎委員)



新宿御苑にて(坂上委員)

着任の御挨拶



文化事業委員会委員長
日本建築美術工芸協会法人会員
木村慶太

文化事業委員会は本年度より「旧文化事業委員会」と「景観シンポジウム委員会」が統合した形でスタートしました。

私は3年ほど前から旧文化事業委員会の活動をお手伝いさせていただいてきたご縁で、このたび委員長を拝命しました。

当委員会は60人規模の講演会から300人超のシンポジウムなど、景観や建築、芸術に係る事業の企画と運営を行う組織です。私達の取り組みが、協会活動の充実度に直接影響をする重要な機関だと思うと、心が引き締まります。参加いただいている方々の所属はデベロッパーから設計事務所、ランドスケープデザイン事務所、各種専門メーカーやゼネコンと、実に多様です。会社も業種も経験も異なるメンバーが一つになってイベントの実施に取り組むところも当委員会の特徴であり大きな魅力の一つです。

私達が直近に開催したイベントについてご紹介いたします。

2020年10月から『地方創生が生み出す景観』というタイトルで兵庫県丹波篠山市、福井県三国町、山形県金山町の3つの街で進行中の地方創生に取り組むリーダー達に登壇をお願いし、3回の連続講演を行いました。2021年3月にそれを総括するシンポジウムを開催し、建築家の隈研吾氏とプロダクトデザイナーの喜多俊之氏に基調講演を、包括的なパネルディスカッションではファシリテーターとして法政大学特任教授の陣内秀信氏にご登壇いただきました。

地域の創生を実現するために取り組んだ法規制の緩和や、様々な役割の人たちを触媒するキーマンの必要性、地域産業や伝統工芸を日常生活に取り入れる試みなどについて議論し、これからの地方創生のあり方、それが生み出す景観やデザインを想像しました。

コロナ禍での開催故に会場での開催とWEB配信のハイブリッドで実施しました。これらのイベントはこれからの地方創生に多大な影響を与える可能性を秘めていると様々な方面よりご評価をいただきました。

今年度以降の活動予定についてご紹介いたします。

建築とランドスケープが醸成する風景を議論するシンポジウムを年内に開催。そして、昨年度の続編として地方創生をテーマにした3連続講演+シンポジウムの企画を2年は継続したいと考えています。

また、美術・工芸と建築の世界の橋渡しをするという私達の協会ならではの企画、エネルギー問題やジェンダーレスなどの世情を捉えた企画、協会の創設者である芦原義信

氏が問うた「都市をパブリックスペースとしてデザインすること」について現状を再検証する企画なども検討を開始しています。

他の団体には出来ないイベントを志高く積極的に実行し、世に影響を与え得る貴重な成果を発信していきたいと思っています。

皆さま、どうぞご指導、ご協力をいただけますようお願いいたします。

文中でご紹介した地方創生の一連のイベント内容を1冊の本にして発刊することとなりました。書籍には記録誌に掲載されていない包括的な座談会や論文も記されています。

是非お手に取ってお読みください。



書名「地域をデザインする vol.1」

日本建築美術工芸協会編／建築画報社刊

サイズ 210×210mm

本文 128ページ

定価 2,200円(税込)

発売 10月末

建築画報社ホームページ

<https://www.kenchiku-gahou.com/>

ご購入は建築画報社ホームページの

「ORDERページ」からお願い

いたします。



表彰・広報委員会より

会報 90 号 P 7 表彰式出席者に会社名・氏名の間違ひがありました。
 AACA 特別賞 (株) 日本設計 福田卓司 塚川 譲
 ご関係の皆様にお詫び申し上げます。

事務局より

— 訃 報 — 心よりお悔やみ申し上げます。

個人会員 **村松映一氏** 8月2日逝去 1938年生 享年83歳 村松映一建築計画室主宰



履 歴 1963年 早稲田大学第一工学部卒業 (株)竹中工務店 入社
 1985年 同社東京本店設計部設計部長 就任
 1991年 同社取締役総本店設計担当本部長 就任
 2005年 同社代表取締役副社長 就任
 2010年 同社退社 村松映一建築計画室設立

協会歴 1988年～2021年 日本建築美術工芸協会 個人会員
 理事 (2001～2012) 監事 (2013～2016)

作 品 東京ドーム、福岡ドーム、アクロス福岡、東宝日比谷ビル地区計画・容積移転、
 銀座シグナス、小田急相模大野ステーションスクエア、他

団体歴 日本建築学会副会長、稲門建築会会長 (2007～2011)、村野藤吾賞選考委員、他

■新入会員・会員の移動 2021年8月～2021年10月(敬称略)

個人情報保護法の定めにより、個人会員は氏名・活動分野、法人会員は会社名・代表者・担当者氏名・会社住所を記載します。

《新入会員》

個人 会 員	金原京子 〒182-0026 調布市小島町 造形家
	本 耕一 〒156-0043 世田谷区松原 建築家

法 人 会 員	建築画報社	代表取締役 櫻井ちるど 担当 総務部 草間聖子	〒160-0022 新宿区新宿2丁目2-14-6 第一早川屋ビル TEL.03-3356-2568
------------------	-------	----------------------------------	--

《会員の移動》

個人 会 員	住所変更	高橋匡太	〒602-8401 京都市上京区薬師前町
		名和研二	〒221-0073 横浜市神奈川区白幡南町
	代表者 変更	(株)宮本忠長 建築設計事務所	宮本夏樹 (前 宮本仁夫)

法 人 会 員	担当者 変更	ヒガノ(株) (株)竹中工務店 (株)安井建築設計事務所	腹子達朗 (前 井口善博) 国分英彰 (前 種石浩史) 清水望実 (前 岡田由美子)
	住所変更	(株)日鋼サッシュ製作所 東京支店	〒171-0014 豊島区池袋2-53-5 KDX池袋ウエストビル5F 〒03-5928-5501

編集後記

暑い夏もやっと終わりを告げ、コロナウイルス感染拡大も大幅に減少し、スポーツの秋、芸術の秋を迎えられそうです。美術界では、あちこちの美術館で団体展が開催され、個人、グループ展も開かれています。日本建築美術工芸協会では、10月25日に開催されます「第30回 AACA 賞受賞者のつどい(第1回)」を皮切りに11月には、「第15回建物視察会」、「第30回 AACA 賞受賞者のつどい(第2回)」、「AACA 賞公開審査」、「景観シンポジウム」の開催が予定されています。皆様には是非ご参加いただき、会員の皆様にとって、親交を深める場になることを祈っております。なお協会開催事業は、協会のホームページに事業の詳細、申し込み方法などを掲載しておりますのでご参照ください。

協会のホームページ「会員紹介」のページでは、会員の皆様のプロフィールなどをご紹介します。ホームページから直接入力することもできますが、今回から申し込み用紙に記入いただき、広報委員会がホームページに入力することができるようになりましたので、お気軽にお寄せください。なお、「会員活動予定への掲載依頼書」も設けていますので、会員の皆様の個展、グループ展など活動のお知らせにご活用ください。(飯田郷介)

aaca 2021.10 no.91

発行人 会長 東條 隆郎
 発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
 〒108-0014
 東京都港区芝5-26-20 建築会館6階
 TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
 URL <http://www.aacajp.com>
 E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
 委員長 飯田郷介
 副委員長 野口真理 田島一宏
 委員 五十嵐通代 金原京子 工藤康博
 竹生田正 竹内春香 中村弘子
 松本 治 三上紀子 森田高年
 山崎和子 山崎輝子 山下治子
 吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション